



収穫期を迎えたサンキューメロン



「畑地かんがい事業」により整備された八竜地域の砂丘地帯

メロン栽培の導入に向け 官民一体の取り組み

北緯40度東経140度線上に位置する三種町八竜地域かつて、日本第2位の面積を誇った八郎瀧の面影を残す承水路がうかがえる同地域の浜口地区では、昭和30年代

砂丘地帯のため思つように米が採れず、水田面積が少ないうえ畑作においても雨水に頼るしかないという条件不利地域のため、県内でも屈指の出稼ぎ地域として知られていました。そのため、古の時代より砂丘地帯でも栽培が可能で、収益性の高い農作物の生産が求められていました。

昭和38年、同地区の農業者数人による、プリンスメロンの試作栽培が行われ、それがきっかけとなりメロン栽培の導入が図られました。

メロン栽培の先進地に赴き栽培技術を学んだり、栽培講習会を積極的に行うなどして、地域農業者やJ・A・行政が一体となつての取り組みが行われました。

八竜メロンと言えば 「サンキューメロン」

昭和41年、本格的な作付けが開始されると、44年から

砂丘地農業発展の起爆剤として導入されたメロン栽培。生産農家やJ・A行政による取り組みが展開され、全国屈指のメロン産地に成長した三種町八竜地域。今春の合併を機に、近年の生産量減少解決のため、かつての隆盛を取り戻す活性化策が今後展開されて行きます。

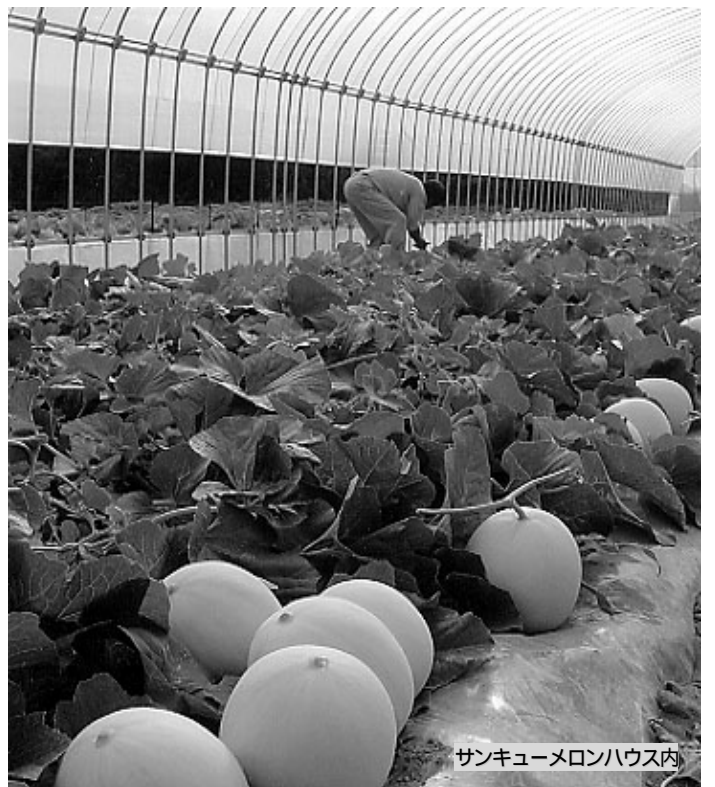
官民一体となつて育む砂丘地農業のブランド「八竜メロン」(三種町)



丹誠こめて育てたメロンをひとつひとつ丁寧に収穫する

50年には国の事業による、畑地かんがい事業」で畑が整備されたことにより、飛躍的に栽培面積が拡大され、300ヘクタールを超えるメロンの一大産地へと成長を遂げました。ピーク時の60年代には330ヘクタール、販売額で15億円を記録しております。

時代になると外観がきれいな白系で果肉が薄い緑色の「サンキューメロン」が開発され、消費者指向からもサンキューメロンの生産に力を入れ、ブランド化を目指した様々な取り組みが行われた結果、全国一の生産量を誇るまでに成長したのです。まさに「サンキューメロン」は現在、八竜メロンの代名詞となっています。



サンキューメロンハウス内

合併を機にメロンの里の再生に向け活性化策を展開

メロンは、トマト、キュウリなどの果菜類に比べて栽培期間が短く、定植(2月下旬)から収穫(6月下旬から8月上旬)まで100日前後と生育が速いことから、高品質のメロンを生産するためには、日々の生育観察と適切な管理作業を迅速に行うことが要求されます。

近年、生産農家の高齢化や作業の重労働、加えて産地間



競争やメロン価格の低迷などにより、栽培面積が120ヘクタールほどに減少しましたが、この春(3月20日)琴丘町・山本町・八竜町の三町が合併して三種町としてスタートしたことを契機に、町では、メロンの里の再生に向け生産農家と共に活性化策を展開していくこととしています。

今年のメロンは4月5月低温からやや生育が遅れていますが、この夏は是非、砂丘地に広がるメロン畑で、八竜の生産農家が丹誠こめて育てた八竜メロンを冷たく冷やしてご堪能ください。